

P-181

虐待予防を視野に入れた若年未婚初産婦への退院支援

姫路赤十字病院 GCU

○石原 裕子、谷口 真紀、小野 真弓、内波久美子、三木 幸代

【目的】若年未婚初産婦への虐待予防を視野に入れた退院支援を振り返り、どのような支援が有効であったか検討したので報告する。
【倫理的配慮】個人が特定できる可能性があるものは、特定できないように記述する。
【事例紹介】A氏10代未婚。生活保護受給。一人暮らし。母親とは絶縁状態。キーパーソンは姉。妊娠中からハイリスク妊婦として保健師が介入。妊娠26週1日に緊急帝王切開で児を出産。児はB病院に搬送入院となった。
【経過と看護介入】稲佐が「周産期にみられるハイリスク母特有の特徴」で示す25項目のリスク中、14項目該当し、虐待の可能性が高いと判断した。A氏の面会は夜間帯が多く、短時間であった。約束の日に来院しないことも多く、電話連絡で次回の面会日を約束し、気持ちが兒から離れないよう関わった。面会時間を昼間に設定することで、母の昼夜逆転の生活リズムを整え、また育児経験のあるスタッフが育児について話をするすることで、育児のイメージ化に努めた。MSW・保健師、こども家庭センターなど関連機関とカンファレンスを行い、母のもとへ退院させる事は是非や地域でのフォロー体制について意見交換を行い、退院日を設定した。児の安全確保を目的に「保健師の訪問は断らない、受診日には必ず来院する」として誓約書を取り、退院となった。退院当日から保健師が訪問し、母児の生活を見守っている。
【考察】若年で虐待のリスクが高い事例に対し、入院中から地域の関連機関と連携し退院調整を行うことで、退院後も継続したフォロー体制を確立することができた。地域との連携を強化することは母児の安全を確保する上で重要である。

P-183

2週間健診を実施して

大津赤十字病院 産婦人科

○浅野 直子、岡本美佐江、英 都貴子、野浪 裕子、松田美千子

【はじめに】産後の入院期間は短く不安をかかえたまま退院する母親は少なくない。退院後早期の接触とより具体的な育児指導の為2週間健診を実施したので報告する。
【活動の実際】1、目的：1) 新生児の健康保持・増進 2) 褥婦の健康保持・増進、不安の軽減 2、方法 1) 対象者：初産婦（産褥4日目に希望確認、支援を必要と判断した母子）2) 開始時期：平成24年10月23日より毎週火曜日 一枠1時間で5枠設定 3) 担当助産師：4年目以上（事前勉強会の参加、マニュアルの熟読）4) 内容：新生児の観察（体重測定、全身チェック）褥婦の観察（表情、児の扱い、乳房の状態、母乳分泌等）5) アンケートの実施：終了時（説明・同意済）に記入、回収
【結果・考察】殆どの母親が受診を希望し、7か月で83名の受診があった。アンケート結果から、内容は母乳育児についての悩みが圧倒的に多く、児に対するものと比較すると3：1の割合となった。授乳方法68.2%、母乳分泌について52.2%など、児については臍に関するもの15.9%、皮膚に関するもの27.2%であった。受診した母親の殆どが、母乳不足感を抱え人工乳の補足量やタイミングについて悩んでいる。そして児の体重増加に不安があり実際に数値を見ることで実感し安心される。また、全ての母親が、助産師と専門的な話しが出来た事で安心し、よかったと答えている。助産師とゆっくり話す機会となり具体的な指導や情報提供で悩みの解消や不安の軽減に繋がったと考える。そして、児を実際に観察し体重測定をすることで助産師外来や小児科受診を勧めることができ今後のフォローに繋がった。
【課題】1) 経産婦なども受診できるよう2週間健診日を増やすこと。2) 助産師教育に関し、現状の教育マニュアルを具体化し事例検討や知識の共有をすること。

P-182

退院後早期の褥婦のストレス因子とコーピング行動

松江赤十字病院 周産期センター

○石原 朱里、須山由梨子

母乳外来受診時のEPDS低得点者と高得点者（以下低得点者、高得点者）のストレス因子と対応するコーピング行動を明らかにすることを目的とし、産後10～20日目に母乳外来を受診した褥婦のうち実家に帰省中、または親に手伝いに来てもらっていた褥婦にEPDS得点を調査し面接を行った。本研究はA病院看護倫理委員会の承認後に開始した。面接内容は録音後カテゴリ化し分析した。調査に同意が得られた褥婦26名のうち低得点者24名、高得点者2名だった。本研究では両者に共通するストレス因子【支援に関するストレス】【環境に関するストレス】【産後の支援に関するストレス】の3つが新たに抽出された。【支援に関するストレス】では退院後に実母・義母の支援を受けていても価値観や育児観の相違があることや実母・義母への負担増大により、【家族に対応してもらう】というコーピング行動そのものがストレス因子となっていた。【環境に関するストレス】では【家族に対応してもらう】【話を聞いてもらう】【他者に助言を求める】という他者の支援を求めるコーピング行動で適応している場合、家族不在時に「孤立感」というストレスを誘発し、《家族の干渉》が大きいとストレス因子となっていた。【産後の生活に関するストレス】では【仕方ないと割り切る】コーピング行動を取っていたが高得点者では実際には割り切れず悶々としていた。
退院後早期の褥婦では、出産後の行動様式の変容と長かった独身生活や核家族の生活から実家での生活に慣れずストレス因子となっていた。低得点者高得点者共に問題焦点のコーピングと情動焦点のコーピングの両方のコーピング行動がとられていたが、高得点者ではコーピング行動が限られている傾向が認められた。コーピング行動に移る前の認知的評価を今後明らかにする必要がある。

P-184

入院時基本情報収集時のプライバシー保護に関する実態調査

仙台赤十字病院 看護部

○三浦 舞、鈴木 由美、松本 亜矢

【目的】自身の情報の取り扱いに関心を持つ患者が増えてきている。情報収集時に看護師が患者のプライバシーを保護するために困難と考えていることについて、実態を明らかにすることを目的とした。
【方法】1) 対象：A病院看護師120名 2) 調査期間：平成24年11月20日～12月5日 3) 調査方法：質問紙による選択自己記入式アンケート調査を行い、単純集計及び χ^2 検定を行った。困難を感じたことがあるか5段階評価し、集計時に「どちらとも言えない」「どちらかといえばある」「ある」「ある」とし、「どちらかといえない」「ない」「ない」とした。4) 倫理的配慮：研究の目的、匿名性、本研究以外には使用しない旨、協力の自由意思、協力の有無によって不利益が一切ない旨を書面に明記し、回答を持って同意とした。
【結果】1) 基本情報収集時に患者に質問する項目で、必要性を問われた項目は「緊急連絡先」「家族背景」「職業」。2) 予定入院で聴取場所確保に困難を感じたことが「ある」70%。3) 緊急入院で聴取場所確保に困難を感じたことが「ある」62%。4) ベッドサイドで個人情報を取り扱うことに困難を感じたことが「ある」81%。経験年数や、内科系・外科系病棟での有意差はなかった。5) ベッドサイドで個人情報を取り扱うときに注意していることは「カーテンを閉める」「本人に同意を得る」「本人が聞こえるくらいの声で話す」。6) アナムネ聴取時、ベッドサイドで聞くことに戸惑う項目は「既往歴」「現病歴」「緊急連絡先」「家族背景」「職業」「宗教」「趣味」。
【考察】看護師から干渉されたくないと考えている患者もいることを考慮し、情報提供の必要性に対し、患者個々にあった説明と対応を行っていく必要がある。